

生徒の皆さんへ

次の図は何に見えるでしょうか？



図1

しばらく考えて、想像してみてください。次第に何かに見えてきますよ。おとなりの友達、クラスの皆で答えを出し合ってみてください。実は、この絵は私が小学校の頃に両親から買ってもらった『星の王子様』という絵本に出てきました。

この本には、大人より小学生の皆さんの方が色々な答えを持っている、と書いてあります。大人は一口に「これは帽子」、とだけ答えるようです。でも、皆さんなら、「象を飲み込んだ大蛇」に見えると思います。どちらの答えがステキでしょうか。帽子か大蛇か？ 私には「大蛇」と見えることがステキで大切だと思います。皆さんも、友達の答えと比べてどうしてそう見えるのか話し合ってみてください。そういえば、この帽子に見えた絵の右側に小さな点がありますね。これが大蛇の目です。左側が象の鼻ですね。子どもに見えて大人には見えないこともあるんですね（逆もありますよ！）。

そう言えば、私の息子が幼い頃に使っていたことばを思い出しました。この子は、海に住む「カニ」が大好きで、私と一緒にカニの横歩きをプールでしてふざけ合っていました。それから2、3か月経ってテレビで「ヤドカリ」を見ていると「ヤドカニ」「ヤドカニ」と連発しては画面を食い入るように見ていました。プールの遊びを忘れてしまっていた私は、「違うよ」、「これはヤドカリだよ」と教えたのですが、ずっと「ヤドカニ」とばかり言っていました。私もその理由をあれこれ考えて、ふと気づきました。クローズアップされたヤドカリを画面で睨んで、「なるほど、これはカニの姿だ！」、と大発見をしました。同時に「象を飲み込んだ大蛇」のことを思い出しました。それから英語のことばも思い出しました。英語ではヤドカリは **hermit crab**（ハーミット・クラブ）と呼びます。**Hermit** は世捨て人のような意味で、**crab** はまさにカニです。「我が子に教えられる」とはこのことですね。異文化の人は「カニ」も「ヤドカ

リ」も似たように見ているのでしょうね。単純に子どもに「違うよ」、とは言えませんね。もしかすると、子どもは「異文化の人」なのかも知れません。下の図を見ながら私の書いたことをおさらいしてみましょう。

(初めてカニを見て好きになる) → (ヤドカリを見る)

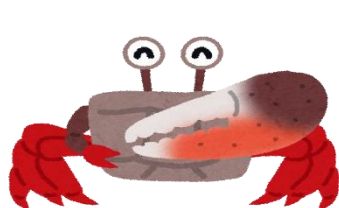


図 2

=



© dak

図 3



「ヤドカニ」 → 「ヤドカリ」

面白いことに、子どもの視点が気になるようになってから、私の勤める大学の近くにこのヤドカリの絵が描かれたアパートがあることに気づきました。大人でもこどもの見方ができる人がいるんだな、と思ってとても感心しました。

では、ヤドカリは島くとうばでは？「アーマン」です。与那原の従兄の家が浜の近くにあるので、幼い頃遊びに行った際によくこのアーマンを見かけました（なぜそう呼ぶのか私も現在勉強中です）。

言いたかったことは、1つの名前は他の沢山のことと関係しています。話が長くなりましたが、そのことを心にとめて、この教材を使って「ことば」と「文化」の学習を続けてみて下さい。直ぐには「面白い」、と感動できないと思いますが、「継続は力なり」を信じて、勉強して行くと「異文化は楽しい」というところまで必ず進めま。それでは、これから植物の名前について一緒に考えて楽しみましょう。

よく見かける花（1）

これは道ばた、庭、花屋さんでよく見かける花です。



図 4

すでに名前を知っている人も多いと思いますが、念のために、「白粉花（おしろいばな）」です。なぜそう呼ばれるのかは、この名前自体が答えてくれます。そうです。お化粧品のように肌をきれいに白く見せてくれる花です。この花には実といえるほどではありませんが、黒い果実ができます。その中の白い粉状のものを化粧品にした訳です。この花をもう少し見てみましょう。いくつかは咲き、他はまだツボミのままです。これには訳があります。この花は夕方近くにはもっと咲きます。それで、島くとうばでは「ゆさんでいばな」と呼んでいます（「ゆさんでい」＝「夕方」）。面白いですね。日本語ではこの花をどう使ったかに関心を置いていて、島くとうばではいつ頃咲くかに関心を置いているんですね。名前から、どこに注目しているかの違いが分かります。残るは英語ですね。「何と呼んでいるのかな？」、「日本語と島くとうばとは違う何か注目しているのかな？」答えは驚きです。Four O'clock（「4時」）です。四時頃に咲くからです。「島くとうばと英語は発音も字も何もかもが違うから、花の名前のつけ方も全く違う」、と書いていませんでしたか（「ヤドカリ」のことを思い出して下さい）。この花の名前に関する限り、日本語の方が島くとうばと英語の見方とは違いませんか。3つのことばを学び続ければ、ステキなものを見方ができると思いませんか。

よく見かける花（2）



図 5

これは？　そうですね。「ハイビスカス」と呼んでいますね。英語でも **hibiscus** と呼ばれています。別名は「チャイナ・ローズ」（China rose）です。話を広げます。人は今まで見たことのない新しいものを見ると、見たことのあるものに譬（たと）えるようです（「ヤドカリ」を思い出して下さい）。この花を初めて見た欧米の人は、見たことのあるバラ、ローズに喩えたのでしょう。だから、「中国から来た最も美しいバラにた花（“China Rose”）」と呼んだのでしょうね。

私が小学生の頃はこの花を島くとうばで、「アカバナ」(「赤い花」)と呼んで親んでいました。もう一度、写真のハイビスカスの中心を見て下さい。花の中心に棒のように長いものが見えますね。この棒の奥の端を折ると、表面からネットリ、ネバネバの液状のものが出てきます。それがノリの働きをするので、私はそれを鼻の頭につけておどけて遊んでいました。でも、しばらくすると、この遊びをしなくなりました。その訳は、もう1つの名前の仏桑華(「ぶっそうげ」)にあります。「これは亡くなった人に捧げる花、お墓の近くに植えていた」と、お年寄り、お兄さんお姉さんから知らされて、怖くなって遊ばなくなりました。でも、今はハイビスカスという名前が定着して、花で遊ぶことはしなくなりましたが、また親しみを感じるようになりました。そして、我が家でも今は鉢植えにしています。名前が変わると人の持つイメージも変わるのである。そして、この花は南国のイメージ、楽園のイメージに変わって行きました。そういえば、ハイビスカスはハワイの州花です。沖縄とハワイがこの花によってつながっているような気がします。皆さんの中にはハワイに移民した親戚がいるという人も多いと思います。花と人が沖縄とハワイを結んでいる、と言えるかも知れませんね。島くとうばでも、昔は何か素晴らしいご馳走や豪華なものに出会ったら、お年寄りは「ハワイ、デムンナー」(「ハワイにいるようで、すごいな」)と言ったそうです。1つの花はたくさんの意味の花を咲かせますね。お年寄りの方々に「アカバナのことを話して」、と聞いてみて下さい。たくさんを懐かしく語ってくださるでしょう。そこから生きた歴史を学ぶことにもなるでしょう。

よく見かける花(3)

「よく見かける」といっても花屋さんにははないのがこの花です。香り、匂いが理由だと思います。さて、もう一度ご覧ください。



図6

「小さくてきれい」、「可愛らしい」、のですが、一般的には「ヘクソカズラ」と呼ばれています。『広辞苑』には古名は「クソカズラ」とあります。花にしてみれば古い名

前より、今の名前の方が2倍も残酷ですね。それでは、英語でこの花はなんと呼ばれているのでしょうか。「きれいな名前であってくれ」、と願っていたのですが、skunk vine (「スカンク・ヴァイン」) です。ここまでお話しすると和名と英名で踏んだり蹴ったりのせいなのか、スカンクのイメージが強すぎるのかで、講話先の小学校では皆が大笑しました。今度は島くとうばでは何と呼ばれているのか...、何と「ヒーヒリカンダ」(意識=オナラカズラ) なのです。3つのことばから踏んだり蹴ったりの3連発です。「小さくてきれい、可愛らしい」と褒めました、これでは可哀そう過ぎますね。でも、別名が救いの手です。早乙女(「さおとめ」)花です。きれいですね。早乙女とは田植えをする女性を意味します。おいしいお米を作る女性の姿に見立てているのですから、遠くから眺めて感謝すべきですね。近寄る必要はありません。この花もたくさんのお話を教えてください。悪いようにばかり言っていると、物事を見る目が狭くなります。物事を深く見るためには単に複数のことばを知っているだけでは足りない。「時には近寄って見るより、離れてみるのが大切だ」、ということをお話しています。「故郷(ふるさと)は遠きにありて思ふもの」という詩が思い起されます。「ヘクソカズラは遠きにありて見るものかな」、ですね。

よく見かける花(4)

この花はどうでしょうか。ピンクか桃色の花をよく見かけます。不思議と空港のフェンスや道路脇で見かけますよね。これは、木に咲くきれいな花です。人は車で一瞬のうちに通り越してしまうのに、なぜかこのきれいな花木が植えられています。なんと呼ばれているのかな？



図7

そうです。「キョウチクトウ」ですね。名前を漢字で書くと面白いことが分かります。「夾竹桃」です。最初の「夾」は「はさむ」ことを意味します。何に挟まれている

かですが、竹の葉です。竹の葉に挟まれた桃の花です。この木をよく見ると葉は竹の葉に似ています。そして、花は桃色ですね。その2つのから「夾竹桃」と漢字で書かれます。人は花を、匂い（例、「ヘクソカズラ」）、葉の特徴（例、後述する「ダンデライオン」）から名づけたり、このように葉と花の特徴を合わせて名づけたりもするのですね。

花の名づけ方も文化によって似たり違ったりするので、花の名前から自分自身の文化、異文化を学ぶこともできるのです。勿論、ことばを学ぶきっかけにもなりますね。

話を戻します。この花は白、赤に近いピンクもあります。なのに、「桃」とするのはなぜか、を考えると、桃色が一番きれいだということでしょう。そして、昔々は「桃」も「桜」と同じくらいにきれいだとされていたのでしょうか（理想郷のユートピア（“utopia”）は漢字で「桃源郷」とも訳せますね）。先の例のハイビスカスを英語の別名でチャイナ・ローズとするのに似ていますね。自分達が何をきれいだと思っているかを基準にするわけです（悪いことではありません）。たかが花の名前ですが、こんなことまで学べるのです。身近にある花名を通してもっと多くの意味の花を咲かせましょう（「心の中に花を咲かそうよ」）。

話を続けます。「夾竹桃」という美しい名前だからといって、触ってはいけません。絶対にいけません。島くとうばでは「ミーフックワァ・ギー」（意識＝「目ふくらませの木」）と呼んでいます。枝、葉、花には毒があります。手で触れて目を触ると、結膜炎どころか目が膨れてしまうということをこの呼び名が教えています（「きれいなバラには棘がある」ですね）。眺めるだけにして下さい（「ヘクソカズラ」も眺めるだけ）。ここで、この花の植えられている場所を思い起こしてみましょう。「空港」であったり、「道路脇」であったりします。何れもがうるさい音がする場所ですね。人に聞いて回ると、防音のためだと言われました。暴風林、防砂林は私も小学校高学年の頃に習った記憶がありますが、防音林は初めてです。でも、案外あり得ることですね。この木はあちこちに枝分かれますし、そういう特徴からきれいな「壁」を作ってくれそうです。花の話題がまさか、音のことになるとは思ってもみなかったでしょう（因みに、多くの人々が蓮の花が咲く時には「ポン」と音がすると言いますが、どうやら、それは疑わしいようです。ネットで確かめられます）。

最後になりましたが、英語ではどう呼んでいるかです。「オリアンダー」(oleander)です。私の持っている英英辞書だと、「きれいだが、毒を持っている」と書かれています。国語辞書にはこの「毒」のことが書いてないものもあります。やはり、「ミーフックワァ・ギー」で納得できますね。触らずに、眺めるだけにしましょう。

よく見かける花（5）

空地でよく見かけますね。それに、草刈をしないと必ずこの「雑草」がはびこりま

すね。



図 8

「ムラサキカタバミ」です。「雑草」と言ってしまいましたが、花はきれいですね。私はこの花にも親しみを感じます。島くとうばでは、「ヤファタ」と呼んでいて、幼い頃にはこれでよく遊びました（多分、この「ヤファ」は「柔らかい」という意味でしょう）。ハート型の葉をつけたまま細い茎から抜いて、さらにその茎をむくと、1本の細い糸になります。2人でそれを絡ませて引っ張り合いをしますと、どちらか1方の糸が切れます。当然切れた方の負けです。こんな簡単な遊びをなぜやったかを思い起してみると、ちょっとした理由が浮かびます。たまに、この茎を束にして切り、塩でもんで食べていました。塩をかけなくても酸っぱくて、そんなに沢山食べられるものではありません。多分、2, 3歳年上のお姉さん達があみ出した「ママゴト料理」だったと思います。「ショッパイ」ことがこの花の英語名と関係します。英名は (wood) sorrel (ウッド・ソレール)です。この後半のソレールは「酸っぱい」(sour)が変化したものです。欧米でも「ママゴト料理」として食べたのかも知れませんね。もう一つ、このカタバミの面白い遊び方がありました。私の少年時代は復帰前でした。あの頃は1セント玉、「アカジン」(小銭)をたくさん持っていました。これは普通、くすんだ銅色なのですが、このヤファタで磨くと金メダルのように光り輝きます。皆さんも10円玉で実験してみてください。輝くと使うのが惜しくなり、貯金する意欲が湧くかも知れませんよ。化学の時間に先生にこの酸っぱい分泌物が何であるか聞いてみてくださいね。

カタバミにも何種類かあるようです。私が見慣れているのは紫ですが、この種類は

外来種のようなです。日本で最初からあったのが黄色のもので、それが「カタバミ」と呼ばれていたようです（白色もあるようです）。語源には諸説あるようなので、これも調べてみて下さい。さて、また「雑草」と思われているにも関わらず、昔は「家紋」としてよく使われていたようです。どこかで読んだことがあります。これはカタバミが勢いよく茂って行く様を取り入れて一族繁栄に思いをはせたようです。そうでなければ、「雑草のように強くありたい」との思いからかも知れませんね。「雑草」は私たちと一緒に住んでいます。時には「きれい」と褒められたり、遊び道具になったり、食べられたり、また時には「雑草」呼ばわりされながらもその「強さ」から望まれたりしているんですね。1つの名前に囚われずに、複数の局面があることに気づくと、囚われから離れて、もっと楽しい見方ができるように思いますが、どうでしょうか。そう考えていると、金子みすゞさんの「みんなちがって、みんないい」の詩が聞こえてくるような気がしますね。

よく見かける花（6）



図 9



図 10

この2つの花をどこかで見ていませんか。2つともとてもよく似ていますが別の名前がついていますよ。ヒントのつもりで少しずつ狭めていきます。図9を園芸用に改良したのが、図10のもので。図9は食用にもなりますが、図10は鑑賞用です。それぞれ、スベリヒユ（「滑莧」）とマツバボタン（「松葉牡丹」）と呼ばれています。そうです。スベリヒユは食べることができます。私も北部の「道の駅」で買って、トーフチャンプルーにして食べたことがあります。売店には島くとうばで、「ニンブトゥカー」と記された札がついていました。数名のお年寄りに聞くと、食べたことはあっても何故そう呼ばれるのかは分からない、という答えが返ってきました。多分の話ですが、「念仏」、「仏」が名前に影響していると思います（皆さんもお年寄りに聞いてみて

下さい)。スベリヒユは沖縄だけではなく、他の県でも食されているようですが、マツバボタンは鑑賞用です。それではここで問題です。この「マツバボタン」という名前
で別の花のことを思い出しませんか。そうです。「キョウチクトウ」の名前のつけ方と
似ていますね。二つの名前を漢字に変換すると「なるほど」、と思えます。

「松葉牡丹」は松の葉と牡丹の花で、「夾竹桃」は竹と桃の花がついていますね。こ
れが分かれば、スベリヒユ（「ニンブトゥカー」）と松葉牡丹を区別できます。2つを
比べると、スベリヒユは花が小さくて、松葉牡丹は花が牡丹の花くらい、まではいか
なくても、大きい、ということです。葉は2つとも松であったり竹の葉であったりす
ると字は教えてくれますが、それは必ずしも簡単には見分けられません。スベリヒユ
の英名はパースレイン（“purslane”）と呼ばれていて欧米の人でもサラダや煮物として食
べているようです。この名前は松葉牡丹も含めてそう呼ぶとされますが、だからとい
って、松葉牡丹を食べることは絶対にしないで下さい。お願いを兼ねて、「松葉牡丹」
だけの英語名は何というか紹介します。名前は複数ありますが、知っていて面白いの
は、「ローズ・モス」（“rose moss”）です。日本語では美しい牡丹の花に喩えられたの
に、英語では別、バラのローズですね。欧米では最も美しい花の代表がローズだから
でしょう。じゃ、その次の「モス」（“moss”）は何でしょうか。それは、「コケ」のこ
とです。そうです、「苔むす」の「苔」です。「ローズ・モス」を勢い良く広がって行
く「苔」に喩えた訳です。「苔」をもう少し深く想像すると、日本では「苔寺」（「こけ
でら」）と呼んで古めかしくて美しい感じがしますが、欧米の人は“moss”を同じように
捉えているのでしょうか。今度 ALT の先生方に質問してみてください。長く日本に住ん
でおられる方やまだ2, 3か月しか住んでいない先生だと、“moss”に関して違った感
じ方をしているかも知れませんよ。もう少し、“moss”の話に長居します。このことば
が覚えづらいと思っている人のために、次の図を紹介します。



図 11

もしかすると、園芸の好きな今のお年寄り「ピートモス」(“peat moss”)と呼んで「水苔」とはもう呼ばないのかも知れませんか。「苔」も「モス」も今では日本語ですね。

話が脱線しているように思うかも知れませんが、決してそうではありません。1つの名前は形としては1個として辞書に載っていますが、実生活では多くのことと切り離すことができません。そう思ってもらえると私も嬉しいです。

ところで、実世界では大体の花は土の上に育つわけですが、花の名前は海に潜って行くこともあります。答えを読む前に1, 2分考えてみて下さい…。ヒントは数年前にディズニー映画に登場しました。『ファインディング・ニモ』の「ニモ」です(図12)。この魚の名前は「アネモネ」(“anemone”)という花から来た愛称です(アルメニアの国花)。「ニモ」は anemone fish の愛称です(「花」が海に潜っていますね)。そして、ニモの隠れ家は「磯巾着」(「イソギンチャク」)ですね。この隠れ家を英語では“sea anemone”と呼んでいます。「海のアネモネ」ですね。それでは、日本語ではニモは何と呼ばれていたのでしょうか。正確にはニモの仲間ですが、「カクレクマノミ」と呼ばれています。そういえば、ニモは危険を感じるとイソギンチャクに身を隠していましたね。これで、「カクレ」の部分は分かります。ここまで書くと、私自身の疑問が湧いてきました。国語辞書にはこの魚は「熊の実」という漢字を当てています。手持ちの国語辞書の何冊かで調べましたが分かりません。ネットで調べると、歌舞伎役者の化粧に似ているからだという説を出しています。そのハッキリ過ぎる化粧方法を「隈取」(「クマドリ」)と呼ぶようです(図13)。そういえば、このニモもかなりはっきりとした模様を見せています。それから、隠れる場所の隈(ニモの場合はイソギンチャク)の「隈」が「熊」に変化して、「実」は「魚」を表すとされています。今のところ確信は持てませんが、楽しい説だと思っています。最後に、「巾着」ってなんだろう、の疑問が出てきそうなので、書きます。「巾着」はお金や薬をいれる袋です。図12で「磯巾着」に隠れようとするニモが見えますね。 図14は「巾着」です。



図 12



図 13



図 14

お金、薬、化粧品等をいれる袋ですね。でも、話はここで終わるわけには行きません。繰り返しになりますが、1つのことばは辞書には1つとして載りますが、現実には沢山のこととつながっていて、生活と広く深く関係しています。皆さんはコンビニのオデンコーナーで図 15 の具を注文したことがあると思いますよ。



図 15

安心して下さい。中にはニモじゃなくてお餅が入っています。この具も「巾着」と呼ばれています。

それでは、この辺で私の「植物の名前で楽しむ自文化・異文化理解」のお話しの巾着を閉じます。続くのは「まとめ」と「自分で進もう」の付録です。

まとめ

以下のことを思い出しながら自分のペースで植物の名前について学習を続けて行きましょう。

1. 世の中が変わり、花のイメージも良くなり、新しい名前が定着することもあります。

例 「アカバナ」は「仏桑華」だったが、今では「ハイビスカス」(“hibiscus”)となり、沖縄とハワイのイメージが重なる。

2. 花は外見だけでは名づけられてはいない。複数の視点に注目して名前がつけられています。

例 1)「ユサンディバナ」はいつ頃咲くかの視点。2)「白粉花」は何に使われるかの視点。3)「ヒーヒリカンダ」、「ヘクソカズラ」、「スカンク・ヴァイン(skunk vine)」は匂いの視点。

3. 花の名前は異文化だからといって、全く異なる意味の名前ではない。共通点もある。

例 1. の3)を思い題して下さい。

4. 花にも人にニックネームがあるように、別名もあります。

例 「早乙女花」(美しい名前) 1.の3の「救い」ですね。

5. 花の名前は外見だけではなく、葉から、または葉と花の名前からできていることもあります。

例 「夾竹桃」、「松葉牡丹」、「ローズ・モス」は「花」と「葉」の組み合わせ。ダンデライオン(“dandelion”)は葉をライオンの歯に見立てている(この後の「付録」を読んで下さい。因みに「ユーミン」がこの花のことを歌っているので聞いてみて下さい。

6. 「雑草」と呼ばれても遊び道具として親しまれたり、家紋として使われたりしているものもあります。

例 「やふあた」を使った「ヤファタオーラシェー」、コインをピカピカにする。旧家の家紋として。

7. 花の名前はその分泌物からつけられる場合もある。

例 「やふあた」の英語名は「ウッド・ソレール」(wood) sorrel。ソレールは「酸っぱい」の sour を意味します。

8. 花の名前は花だけにつけられるのではなく、他の多くのものにも喩えられています。

例 アネモネ→ニモ (アネモネ・フィッシュ) →シー・アネモネ (イソギンチャク)

9. 漢字は難しいかも知れないけれど「どうしてこんな名前？」について答えてくれることもあります。

例 「夾竹桃」、「松葉牡丹」等ですね。

10. 「島くとうば」、「日本語」、「英語」は3つ異なることばですが、どちらも素晴らしいことばです。優劣をつけることはできません。むしろ3つを楽しく学ぶことで実りある学習の花を咲かすことができます。

この章で使われた花、その他のものの名前

島くとうば (カッコは日本語) 「アーマン」(ヤドカリ)、「アカバナ」(ハイビスカス)、「ヒーヒリカンダ」(ヘクソカヅラ)、「ミーフックギー」(夾竹桃)、「ヤファタ」(カタバミ)、「ニンブトゥカー」(滑莧)、「ジューシーマー」(雑炊)

英語 hermit crab, hibiscus, China rose, skunk vine, oleander, (wood) sorrel, sour, rose moss, peat moss, purslane, anemone, anemone fish, sea anemone, burdock touch me not, dandelion

付録：自分で進もう

1つの花が咲かせるたくさんの意味

草花には「花言葉」があります。それをインターネットや学校の図書館で調べると一歩進んだ楽しい学習ができます。夏休みの「自由研究」には最適です。お友達と一緒にやっても楽しく勉強できます。

さて、ゴボウは日本人にとっては花というよりは野菜・根菜のイメージがありますが、アメリカでは花として捉えられています(ゴボウの花をネットで検索してみてください。アザミの花に似た、きれいな紫色の花を見ることができます)。そのせいか、アメリカの人はあまりゴボウを食べないようです。当然、花としての「ゴボウ」(burdock=バードック)にも花言葉があります。その一つに「私に触れるな」(touch me not) がありま

す。そうです。タンポポの別名も **touch me not** ですね（今ではタンポポもダンデライオンとカタカナでも記されますね）。花も人と似ていて別名、私たちがいえば、「ニックネーム」がります。タンポポの場合には、咲き終わった花は白い羽がついていて、それで種をあちこちに飛ばします。触ったり、息を吹きかけたりすると飛び散って行きますね。「私に触れるな」の意味とは逆に、触れると種がまかれることになりタンポポにとってはありがたいことなのですが。

ゴボウの話に戻ります。せつかく、野菜として捉えている私たちですから、料理の話につなげます。「ゴボウ巻」を食べたことがありますよね。そして、図 16 の「金平（きんぴら）ゴボウ」もあると思いますよ。



図 16

おいしそうですね。でも、アメリカの人がこの **burdock** の料理を「おいしそう」と思うかどうかはわかりません（花と意識するからです）。このゴボウ料理は次の絵と関係があります。



図 17

そうです。絵本で読んだことがありますね。「足柄や一まの金太郎、熊にまたがり相撲の稽古 . . . 」の金太郎です。金太郎の子どもも怪力の豪傑で「金平」だったという話があります。「金平ゴボウ」を食べると金太郎・金平のように強くなれるよ、との思いでつけられた料理名でしょう。

島くとうばではゴボウは「ぐんぼー」ですね。沖縄でもおいしく食べられていますね。オジーさんオバーさんに「ぐんぼー料理」についてお話しを聞いてみて下さい。以外なことを語ってくれるはずですよ。例えば、沖縄と北海道のことについて。これも宿題としてチャレンジしてみてください。どんな時に食べるか、小さい頃には好きだったか嫌いだったかをたくさん語ってもらうように、知恵を絞ってインタビューしてみてください。1つの花、ものの名前は多くのことが学べるきっかけを作ってくれています。

ゴボウの花は「アザミの花に似ている」と書きましたが、その棘のようなものを英語では bur と呼んでいます。参考のために、下の図 18 と図 19 のアザミの花とゴボウの花の写真を見て下さい。

<アザミの花>

<ゴボウの花>



図 18



図 19

次に自主学習課題をしましょう。1) アザミの花言葉は何か、自分で調べてみてください (ゴボウの花に似ているから、似ている花言葉かな?)。そして、2) タンポポの花言葉とも比べてみて下さい (ゴボウの花ことばとタンポポの別名は同じでしたね)。

話をタンポポに移します。なぜ「ダンデライオン」(“dandelion”)というのか? 花が黄色いから「ライオンのたてがみ」に似ているから、とかん違いする人も多いようですが、正しくは花ではなく、葉を観察した結果の名前です。dan が「歯」です (そうです、dentist 「歯医者」の den と dan は似ていますね)。そう、de が「の」で、lion が「ライオン」です。合わせて dandelion です。つまり、葉がライオンの歯のようにギザギザだからです。それではライオンが口を開けた時の写真と dandelion の葉を見比べてみましょう。



図 20



図 21

なるほど、確かにライオンの歯はタンポポの葉に喩えられる可能性ありのギザギザですね。

それでは、日本語でなぜ「タンポポ」というのか？これにも面白い説があります。和楽器の鼓を思い出して下さい。タンポポのどこかに似ていませんか？これはツボミが鼓に似ていることと関係するようです。鼓を叩くと、「タン、ポポ」と聞こえるようです。これが正確な語源かどうかハッキリしませんが、面白いですね。それで、別名を「ツヅミ草」と呼ばれているようです。楽器になったかと思うと、タンポポの若葉は実際の食用にもなっています。昔、私も亡くなったお祖母ちゃんと摘んで「ジュシーメー」（「雑炊」）の中に入れて美味しく食べたことがあります。アメリカの一部では花卉を「タンポポワイン」としても使っていますし、乾燥させた根はコーヒーの代用にも使っているようです。中国では漢方薬としても使用されていて、漢字で「蒲公英」（ほうこうえい）と呼ばれて、胃腸薬としても知られています。

どうですか？たった1つの花も沢山の意味を咲かせていることが分かりますね？草、花、木は皆さんの目の前にあります。どうか、自分の好きな植物を調べて、色々なことを学ぶきっかけにして下さい。オジーちゃん、オバーちゃんにタンポポを島くとうばでは何と呼んでいるか聞いてみて下さい。関係するたくさんの物語を聞かせてくれるはずです。私がここに書いたこと以外のステキなお話しを聞かせてくれると思いますよ。オジーちゃん、オバーちゃんが先生になってくれるって、ステキなことですね。これからも島くとうば、日本語、英語の学習を楽しく続けて行って下さい。

この章の画像は営利を目的としない「教育」目的であるために、使用が許可されています。